

2021 年度

北九州市立大学 FD 活動報告書

北九州市立大学 FD 委員会

2021 年度FD 活動報告書

目次

1. はじめに	1
2. FD 研修報告	
(1) 春季新任教員研修	3
(2) 夏季新任教員研修	6
(3) 第 1 回全学 FD 研修	9
(4) 第 2 回全学 FD 研修	11
(5) 第 3 回全学 FD 研修	13
3. 授業のピアレビュー報告	
(1) 授業のピアレビュー概要	15
(2) 2021 年度ピアレビュー実施状況	15
(3) 各部局の取組状況	15
4. 【2021 年度 特集記事】	
アフターコロナだからこそできる、授業の工夫例	35
5. FD 委員会について	
(1) 活動概要	51
(2) 活動一覧	52
(3) 委員構成	54
(4) 委員会議事録	54
6. おわりに	65

※Web ページ掲載にあたって原本から一部削除した頁があります

第 1 章

はじめに

はじめに

副学長（教育・FD 担当）
FD 委員会委員長 柳井 雅人

2021 年度も引き続き新型コロナ対応に迫られた 1 年であった。授業は原則対面としながらもソーシャル・ディスタンスを配慮した、教室のキャパシティを考慮して、180 名を超えるものについては遠隔授業とした。しかしながらその他については対面授業を実施した結果、授業クラスを基準とした比率で、対面授業の比率は 90%を超えるという高い水準になった。

本学においては学部や組織の創意工夫を重視した「ボトムアップ型」という特色ある FD 活動を推進し、認証評価や法人評価で高い評価を受けてきたところである。ここでは、FD（授業改善）活動が、教育の質的改善と質の高い人材育成を行うための重要なツールであるという認識がある。その手法について可視化するとともに、FD の成果を教職員全体で共有しながら、実践的に活用していくものにしていく必要がある。つまりこの活動自体が内部質保証を高度に保つための重要な作業となっているのである。

この考え方に基づく FD 研修も、コロナ対策を受けて、遠隔授業の確実な実施法、限られた予算の中での創意工夫などを中心として行うこととなった。教育関係では、主な研修内容として「アフターコロナを見据えた反転授業方式のアクティブ・ラーニング」(2021. 8. 19)、「アクティブ・ラーニング型授業における学生の学習を促す評価」(2021. 11. 25)、ひびきのキャンパスにおいて、「ポストコロナの教育を強化する Moodle 活用ワークショップ」(2021. 9. 21)が実施された。

授業評価アンケートについては、Moodle を活用することにより、学生が遠隔操作で入力するようにしている。講義中に入力作業をお願いしているが、それでも回答率が伸び悩んでいることが課題として浮き彫りになっている。またその結果について、教員がコメントを回答しているが、どの程度講義にフィードバックされているのか、さらに分析していく必要がある。また、学科からの FD 研修の提案数が減少傾向にあることも注視していきたい。こうしたことも含めて、本学における FD 活動は曲がり角に来ていることも事実である。教職員は内発的に FD 活動の必要性を感じて、主体的・自律的に取り組み、参画することを前提としながらも、大学全体として組織的に検証、改善提案する体制を充実させていくべきである。

大学の組織体制としては教育改革推進室を軸として、IR 室の整備やアセスメントプランの策定を終了しており、これを土台として教育現場の質的改善と向上をめざすサイクルが出来上がっている。教育の質的改善を図るために、教職員の認識が一致するよう、FD 活動を一層深めていく必要があろう。

最後に、愛媛大学から FD アドバイザーとしてご就任していただいた中井俊樹先生には、1 年にわたり熱心な FD 活動へのご協力を賜ってきた。この場を借りて、厚く御礼申上げたい。

第 2 章

FD 研修報告

(1) 春季新任教員 FD 研修

■ 日 時：2021 年 4 月 8 日（木） 13:00 ～16:00

■ 場 所：オンライン・ライブ方式（Zoom）

■ 研修のプログラムと担当者：

	プログラム内容	担当
1	教育の世界へようこそ	中井 俊樹 FD アドバイザー
2	1 回の授業をつくる	
3	発問で思考を促す	
4	発問と指示を組み合わせる	
5	協同学習を取り入れる	
6	授業時間外の学習を促す	
7	学生の学習を評価する	
8	まとめとふりかえり	

■ 参加者数：新任教員 20 名、他 3 名（FD 委員長、FD 副委員長、FD アドバイザーを含む）

■ 内容の要約

専門分野に関する知識や技能をもっているからといって、必ずしも効果的に教えられるというわけではない。大学教員には、教える内容に関する知識と教えるための知識の両方が必要だからである。本研修では、新任教員がより満足できる授業を実践するために、授業方法の基礎を身につけることを目的とした。教育活動の特徴、1 回の授業の構成、発問の方法、発問と指示を組み合わせ、協同学習の方法、授業時間外の学習を促進、学生の学習の評価といったテーマにおける考え方、論点と課題、実践における工夫などを理解できるようにした。さまざまな実践方法を紹介したが、自分の教育観にあった教育方法の型をつくっていくために、自分の授業に取り入れたいものを段階的に取り入れ試行錯誤されるべきである。

■ 研修結果とコメント

例年では対面形式で実施されていた研修であるが、今年度はオンライン・ライブ形式での実施となった。このような中、研修は概ね順調に進めることができた。研修後のアンケートによると、肯定的な評価が多く、自由記述においても多くの肯定的な意見がみられた。一方で、オンライン・ライブ形式での研修運営のノウハウ不足により、当初予定していたグループディスカッションが実施できない事態が生じた。入念な事前準備とオンライン・ライブ形式の研修運営ノウハウを蓄積することである今後の課題である。

また、アンケートの自由記述により、様々な疑問をもった参加者がいたことがわかる。今回の研修ではいくつかの質問は受け付けたが、もっと多くの質問を受け付けた方がよかったと思われる。事前に教育上の悩みを確認したり、質疑応答の時間を増やしたりするといった改善策も考えられる。

(2) 夏季新任教員研修報告

■ 日 時：2021 年 9 月 17 日（金） 14:00～16:30

■ 場 所：オンライン・ライブ方式（Zoom）

■ 研修テーマ：「授業の振り返りと改善」

■ 研 修 目 的：1 学期に新任教員が行った授業について、授業設計、授業工夫のポイント、授業実践結果、改善計画などを報告し、その内容について質疑応答することによって授業工夫へのモチベーションを高め、また授業工夫についての情報を共有化すること。またグループ討論によって、さまざまな工夫や問題を共有し合うこと。

■ 研修のプログラムと担当者：

	プログラム内容	担当
1	授業の振り返り	中井俊樹 FD アドバイザー
2	教育観の形成	
3	教育における倫理	
4	質疑応答	

■ 参加者数：新任教員 23 名、他 4 名（FD 委員長、FD 副委員長、FD 委員、アドバイザーを含む）

■ 内容の要約

本研修の主な目標は、新任教員の授業の振り返り、および今後に向けて改善点を明らかにする過程で、自分の教育観や倫理観も明確にするというものであった。本研修では、事前に「あなたの考える理想の教育とはどのようなものですか」「前期の授業は自分の教育理念と照らし合わせてどうでしたか」という質問について 300 字程度でまとめるという課題を出していた。プログラムの「授業の振り返り」では、新任教員が 1 学期の授業の自己評価を行った上で課題や改善策を報告し、その内容について、全員で質疑応答を行った。「教育観の形成」では、様々な教育観を紹介した上で、教育観と実践についてのグループディスカッションを行った。「教育における倫理」では、教員に求められる倫理や論点を紹介した上で、教育上の倫理的課題についてのグループディスカッションを行った。最後に事前に寄せられた新任教員からの質問に対して応答を行った。

■ 研修結果とコメント

本研修は、春季研修と同様にオンライン・ライブ形式で実施した。研修アンケート回答者 22 名のうち、全体的印象としての 86%は「よかった」と肯定的な反応であった。春季研修の課題を受け、事前準備の上で滞りなくグループディスカッションを行うことができた。また事前に課題提示、研修資料配布、質問受付を行ったため、研修をスムーズに進めることができた。アンケート結果から、これらについて肯定的なコメントが見られた。とりわけ、教員間の情報共有やディスカッションに対する肯定的なコメントが多い。研修において教員間の情報共有やグループディスカッションの重要性が高いことが確認できた。

(3) 第1回 全学FD研修

- 日 時：2021年8月19日（木）14：00～16：00
- 形 式：オンライン・ライブ方式（Teams）
- 対 象 者：全教員（必修研修）
- 参 加 者：223人（北方153人、ひびきの70人）※出席＋オンデマンド視聴
- 参 加 率：84.8%（北方85.7%、ひびきの82.4%）
 ※欠席者への後日フォロー実施を含み、サバティカル休暇などを除く
- テ ー マ：「アフターコロナを見据えた反転授業方式のアクティブ・ラーニング」
 愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室長 教授
 中井 俊樹 先生（FDアドバイザー）

■ 出席者内訳

学科	出席者	オンデマンド視聴
外国語学部	26名	3名
経済学部	19名	3名
文学部	29名	2名
法学部	21名	5名
地域戦略研究所	4名	1名
国際教育交流センター	3名	0名
地域共生教育センター	0名	1名
情報総合センター	1名	0名
大学院マネジメント研究科	6名	2名
基盤教育センター（北方）	24名	0名
基盤教育センター（ひびきの）	7名	0名
エネルギー循環化学科	10名	4名
機械システム工学科	11名	0名
情報システム工学科	13名	1名
建築デザイン学科	11名	0名
環境生命工学科	8名	3名
環境技術研究所	2名	0名
その他（学長、特任教員）	2名	1名

■ 研修の概要

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の拡大を受け、2020年度から多くの教員が遠隔授業実施のための試行錯誤を行ってきた。学生の主体的な学びを促す上で、教員の遠隔授業実施の経験をどのように活かしていくかを検討する機会を提供するために、2021年度全学FD研修として「アフターコロナを見据えた反転授業方式のアクティブ・ラーニング」をFD委員会で開催した。授業時間外学習として事前学習動画や課題を活用し、「発問で思考を促す」手法や「共同学習」の手法など、授業時間内に学生の主体的な学びを促す手法を紹介した。

■ 実施結果

本研修の参加者数は223名と研修参加率は84.8%であった。本学第3期中期計画における授業改善に向けたFD活動への参加率目標である70%以上を満たすものであった。本研修は、本学第3期中期計画である、事前事後学修時間を増加させること、アクティブ・ラーニング等の推進、eラーニングプラットフォーム等ICTの活用と整合的である。本研修の結果、これらの中期計画実施にあたっての教員の意識付けとともに、および具体的な手法への理解を促すものとなった。本研修はオンライン開催であった。アンケートへの回答数、および自由記述の回答数と回答分量が大変多く、関心の強さがうかがえた。「今後の教育活動の参考になりましたか」という質問に対する回答として「非常に参考になった」65名、「参考になった」126名と肯定的な回答が多かった。研修は概ね良好に運営できたと評価できる。

(4) 第2回 全学FD研修

■ 日 時：2021年11月25日（木）14：40～16：40

■ 形 式：オンライン・ライブ方式（Teams）

※後日オンデマンド配信

■ 主 催：FD委員会

■ テー マ：「アクティブ・ラーニング型授業における学生の学習を促す評価」

■ プログラム

1	研 修	FD アドバイザー 中井 俊樹 先生 (愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室長 教授)
2	事例発表 ①	「技術者のための倫理」 基盤教育センター ひびきの分室 辻井 洋行 先生
3	講評と質疑応答	2 の内容について
4	事例発表 ②	「キャリア開発Ⅰ・Ⅱ」 経済学部 経済学科 前田 淳 先生
5	講評と質疑応答	4 の内容について
6	ブレイクアウトセッション	グループディスカッションと発表

■ 参加者数：38名

※代表者のみ参加

(内訳)

外国語学部	2 名
経済学部	5 名
文学部	3 名
法学部	5 名
地域創生学群	2 名
基盤教育センター（北方）	4 名
基盤教育センター（ひびきの分室）	2 名
マネジメント研究科	1 名
国際環境工学部	8 名
FD アドバイザー	1 名
発表者	2 名
FD 委員	3 名

■ 研修の概要

今年度 8 月に実施した第 1 回全学 FD 研修では「アフターコロナを見据えた反転授業方式のアクティブ・ラーニング」を実施した。本研修では、引き続き本学のアクティブ・ラーニング推進のために、「アクティブ・ラーニング型授業における学生の学習を促す評価」をテーマとした。まずは本学 FD アドバイザーより学習評価の基本的な知識の解説があり、その後、教員の関心が高い大規模授業におけるアクティブ・ラーニング実践例の発表を行った。第 1 発表は、環境工学部学生に担当されている基盤教育科目「技術者のための倫理」、第 2 発表は経済学部学生に担当されているキャリア科目「キャリア開発 I・II」であった。その後、FD アドバイザーより実践例の講評が行われた。最後に、当該テーマについて参加者によるグループディスカッションが行われた。

■ 実施結果

本研修では、各学科の代表者が参加する形式をとった。参加者は各学科の代表者であり 38 名であり、すべての学科からの参加があった。代表者はそれぞれの所属学科教員へ広く研修内容のフィードバックを行うこととしている。また研修内容はオンデマンド形式で学内教員に公開された。本研修は、本学第 3 期中期計画である、事前事後学修時間を増加させること、アクティブ・ラーニング等の推進、e ラーニングプラットフォーム等 I C T の活用と整合的である。本研修の結果、これらの中期計画実施にあたっての教員の意識付けとともに、および具体的な手法への理解を促すものとなった。アンケートの結果を見ると「今後の教育活動の参考になりましたか」という質問に対する回答として「非常に参考になった」9 名、「参考になった」17 名と肯定的な回答が多かった。研修は概ね良好に運営できたと評価できる。

(5) 第3回 全学FD研修

■ 日 時：2022年3月30日（水）11：00～12：00

■ 形 式：オンライン・ライブ方式（Teams）

※後日オンデマンド配信

■ 主 催：教育改革推進室 教学 IR 推進部門（FD委員会 共催）

■ テーマ：「データで見る」コロナ禍における本学学生の学修時間、学修相談、学生支援
～2020年度学修行動調査結果より～

■ 説明者：古川 洋章 先生（齋藤 朗宏 先生）

■ プログラム

1	開会のあいさつ	教育改革推進室 室長 柳井雅人 先生
2	報告（40分）	教育改革推進室 教学 IR 推進部門 古川洋章 先生
3	質疑応答（20分）	教育改革推進室 教学 IR 推進部門 古川洋章 先生、齋藤朗宏 先生

■ 参加者数：150名

出席者内訳

学科	出席者
外国語学部	18名
経済学部	15名
文学部	23名
法学部	19名
地域戦略研究所	4名
国際教育交流センター	2名
地域共生教育センター	0名
情報総合センター	1名
大学院マネジメント研究科	5名
基盤教育センター（北方）	20名
基盤教育センター（ひびきの）	3名
エネルギー循環化学科	6名
機械システム工学科	10名
情報システム工学科	9名

建築デザイン学科	8 名
環境生命工学科	4 名
環境技術研究所	2 名
その他（学長、特任教員）	1 名

■ 研修の概要

本学教育改革推進室教学 IR 推進部門により、2021 年 4 月 5 日から 4 月 23 日に本学学生を対象に実施した 2020 年度学修行動調査結果の分析結果が報告された。コロナ禍における学生の学修時間、学修相談、学生支援といった学生の活動状況について、分析した結果が示された。また得られた結果から「支援を要する可能性がある学生」を抽出する手段として、学生の行動の傾向について考える機会が提供された。最後に、質疑応答が行われた。

■ 実施結果

本研修の参加者数は 150 名であった。本研修は、本学第 3 期中期計画である、事前事後学修時間を確保することや学生支援の充実させること等と整合的である。本研修の結果、これらの中期計画実施にあたっての教員の意識付けとともに、データに基づき学生の行動傾向について考える機会となった。アンケートへの回答数、および自由記述の回答数と回答分量が大変多く、関心の強さがうかがえた。「今後の教育活動の参考になりましたか」という質問に対する回答として「非常に参考になった」39 名、「参考になった」90 名と肯定的な回答が多かった。研修は概ね良好に運営できたと評価できる。

第3章

授業のピアレビュー報告

(1) 概要

以下に示す授業のピアレビュー実施状況と報告は、今年度における各部局各学科等で行われたピアレビュー活動の報告である。“授業のピアレビュー”活動は、教員相互の授業公開・参観・授業改善のためのミーティングを含んでいる。この活動は、授業の質向上にとって効果的な方法の一つであり、本学では十数年前から持続的に行われてきた。現在、授業のピアレビューの具体的方法（担当者、回数、やり方など）については、それぞれの部局・学科の方針に基づいて独自に行われている。

(2) 実施状況

部局		実施授業回数
外国語学部	英米学科	5
	中国学科	1
	国際関係学科	3
経済学部	経済学科	11
	経営情報学科	
文学部	比較文化学科	5
	人間関係学科	1
法学部	法律学科	2
	政策科学科	2
地域創生学群	地域創生学類	2
国際環境工学部	エネルギー循環化学科	8
	機械システム工学科	4
	情報システム工学科	9
	建築デザイン学科	7
	環境生命工学科	4
基盤教育センター	教養教育部門	12
	語学教育部門	
	ひびきの分室	
社会システム研究科		1
法学研究科		2
マネジメント研究科		6
合計		85

(3) 各部局の取組状況

2021年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	外国語学部	学科等	英米学科
--------	-----	-------	-----	------

2. 部局の実施方針、方法

各教員が学期に1度、お互いの授業を見学しあうピア・レビューを実施する。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	Leadership Theory	3	12	11			
2	社会システム総合概論	1	15	12			
3	Gender and Communication Studies	2	76	13			
4	英語科教育法IV/D	1	18	14			
5	Introduction to Cultural Comparison	2	98	15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

It was very informative to watch this class. / The class was very well managed, the student presentations went smoothly and were well thought out. / The students not giving presentations were actively listening and engaged in the classroom activity. Very good class and very interesting. Engaged students. Considerable thought and English ability displayed in carefully prepared presentations. Class tutor organized, supportive and attentive to in-class student needs.

5. 成果と課題

従来型の対面授業に加え、オンラインの要素を取り入れて学外から講演者を迎えて実施するなど、創造的に授業が運営されていることがうかがえる。授業運営に関わる教員間の意見交換や情報交換の機会として、英米学科のピアレビューは大きな成果を挙げたと言える。来年度以降も継続していきたい。

2021年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	外国語	学科等	中国語学科
--------	-----	-----	-----	-------

2. 部局の実施方針、方法

中国学科の教員数が少ないため、ピアレビューは年1回（通常は2学期）実施することとなっている。基本的に、①手を挙げる教員が実施授業を決める；②FD委員をはじめ、学科長及び学科教員が参加する；③FD委員が作成した報告書を学科会議で報告する。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	中国語音声学Ⅱ	2	34	11			
2				12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・1年次で学んだ内容を取り入れながら、無理のないスピードで進められており、大変分かりやすく感じた。
- ・まず日本語の例を挙げて感覚をつかませ、その後中国語について説明されていたのが良かった。
- ・PPTが丁寧に作られており、教科書だけでは分かりづらい部分などの説明を、学生が熱心に板書している姿が印象的であった。若干スライドの回しが早いように思われたが、授業後Moodleにあげるとのことだったのでフォローはできていると思う。
- ・コメント用紙は理解度のチェックにも使われているようであった。授業の初めに前の時間にどんなコメントがあったか簡単に紹介していたが、必要があれば学習事項を補足するのだと思う。

5. 成果と課題

・教員の一方的な説明だけではなく、学生同士の練習や活動をテンポよく取り入れながら、学生の理解を深めながら講義を進める方法、理解度チェック用のコメント用紙を用い、理解度をチェックする方法、など、見習うことが多かった。

2021年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	外国語学部	学科等	国際関係学科
--------	-----	-------	-----	--------

2. 部局の実施方針、方法

本年度は、対面授業の開始を受けて、とくに1・2年生向けの必修科目の更なる改善を図った。1学期には、新任教員1人が行った1年生向けの必修科目「国際関係概論」講義と、2年生向けの必修科目「基礎演習」に対するピアレビューを、それぞれ行った。そして、2学期には、別途にピアレビューは実施せずに、1学期の「基礎演習」に対するWGの報告書を土台に、改善検討会を開き、当該授業の更なる質向上を講じた。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	「国際関係概論」	6	90	11			
2	「基礎演習」	10	92	12			
3	「基礎演習」検討会	11		13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

オムニバス形式の必修科目「国際関係概論」講義を対象としたピアレビューでは、レジュメなどの準備から、話し方や受講者とのコミュニケーションなど、授業方式や内容に関する幅広い提言がなされた。必修ゼミ科目の「基礎演習」に対するピアレビューでは、恒例のプレゼン大会を対象にしたが、プレゼン一般に関する評価に加えて、とくに評価について様々な指摘があった。さらに2学期には、「基礎演習」に対するWG（太平、政所、柳先生）が作成した報告書を土台に、①当該ゼミで身につけるべきスキル、②プレゼン大会の日程と15回の按分、③プレゼン大会での評価項目などについて、更なる改善策を講じていった。

5. 成果と課題

新任教員の講義に対するピアレビューは、当該授業の質的な向上につながるだけでなく、学科授業体制全体のバランスを取る上でも役立った。さらに、必須演習科目の「基礎演習」の場合、1学期のピアレビューに加えて、2学期にかかるWGのFD活動成果を土台に、授業改善のための検討会を開き、具体的な改善策を設けることができた。来年度には、こうした成果を踏まえつつ、授業の質向上に向けた活動を強化していく。

2021年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	経済学部	学科等	経済学科／経営情報学科
--------	-----	------	-----	-------------

2. 部局の実施方針、方法

各教員に対し、各学期1回以上のピアレビューの実施（1枚以上のピアレビュー報告書の提出）を依頼している。

ピアレビューの機会として、新任教員の担当講義をオープン・ピアレビューとして設定しているほか、入門演習プレゼンテーション大会（第1学期）やポスターセッション大会（第2学期）、他大学との交流ゼミなどもピアレビューの対象としている。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	入門演習（経済学科）	6	150	11	2021研究交流会（インゼミ）	1	200
2	入門演習（経営情報学科）	4	150	12			
3	数学	7	80	13			
4	人的資源管理論	4	100	14			
5	経営統計Ⅱ	1	28	15			
6	ポスターセッション大会	8	90	16			
7	事業計画論	5	30	17			
8	金融リテラシー講座	2	35	18			
9	専門演習Ⅱ	1	16	19			
10	環境問題事例研究（国際環境工学部）	1	240	20			

4. 出された主な意見、コメント

講義系科目においては、学生の興味・関心を引き出す取り組み（時事的なトピックを取り上げる、学生の身近な事例に引き付けて説明する）や学生の集中力を途切れさせないようにする取り組み（複数のトピックを取り上げる、学生の理解を確認しながら進める）、声のトーンなどについて参考になったとの意見が多く出された。

演習系科目においては、他のゼミの報告内容や報告資料の作り方、発表の方法などから自身の授業改善につながるヒントを得たとのコメントが多かった。

5. 成果と課題

ピアレビューを実施いただいた（ピアレビュー報告書を提出いただいた）先生方は概ね他の先生方の授業から自身の授業改善につながるヒントを得ておられ、FDとして授業の質向上に資する活動が行えたと考えている。

一方で、教員間でピアレビュー実施状況に濃淡がみられた。

FD委員として、ピアレビューの機会を増やすなど、より多くの先生方にピアレビューを実施していただけるような環境づくりに努めたいと考えている。

2021年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	文学部	学科等	比較文化学科
--------	-----	-----	-----	--------

2. 部局の実施方針、方法

- 演習・実習科目を除くすべての専門科目（非常勤講師担当を含む）を原則としてピアレビューの公開科目と定め、レビューの実施に努める。
- 複数教員担当科目でのピアレビューに重点を置く。
- 非常勤講師に対しても、ピアレビューへの参加を促す。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	国語科教育法Ⅲ	1	9	11			
2	オープンキャンパス模擬授業（比文）A	4	100	12			
3	オープンキャンパス模擬授業（比文）B	4	100	13			
4	メディア文化概論／日本の大衆文化	4	90	14			
5	アジアの中の日本文化	3	110	15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- 学生の興味関心を引くようなアクチュアルな主題設定や、聴講者の集中力を持続させる授業構成、視聴覚教材の有効利用の仕方、授業形態（対面／遠隔ライブ／オンデマンド）の多元的利用など、多角的な（そして好意的な）意見・感想が数多く出された。
- 聴講した教員自身の成功・失敗体験に基づきながら、授業担当者（被レビュー者）の方法を評価し、意見をフィードバック、知見を共有するような場面も多々見られた。

5. 成果と課題

成果：

- 非常勤教員や外部講師をレビュー対象に据えるという学科の目標を達成することができた。
- オープンキャンパスの模擬授業をレビューの対象とすることで、高校生に対して学問・研究の実際や魅力を語るスキルが重要だという認識を得て、教員間で共有することができた。

課題：

- 非常勤教員によるレビューへの参加を、次年度以降も継続して行えるかどうか。
- レビュー提出後に、そのレビューをもとにした意見交換にまで展開し、「書いたきり」で終わらせないこと。

2021年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	文学部	学科等	人間関係学科
--------	-----	-----	-----	--------

2. 部局の実施方針、方法

昨年度までは、新しく採用された教員によるピアレビューを中心に実施してきたが、本年度は該当教員がいないこともあり、実施方針を変更することとした。具体的には、人間関係学科の知の継承を中長期的に図るべく、ピアレビューを通してベテラン教員の授業のノウハウを、主に若手教員が学ぶ機会を設けるという方針である。今後もしばらくはこの実施方針を継続したいと考えている。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	社会福祉学概論	4	80	11			
2				12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

・新鮮な知的刺激を味わえた。・配布資料がスライドそのものでメモスペースもあり、板書に追われることなく落ち着いて授業を聞くことができた。・話す速度がちょうどよく、聞きやすかった。もっと学生が聞きやすい話し方を心がけたい。・最初に「今日の授業で知っていてほしい人物」を提示する手法は効果的だった。本授業の到達目標が明確になり、学生の授業へのモチベーションにもプラスに働いていた。・紙おむつを学生に配布するというのも興味深く、優れたアクティブラーニングだと思った。・教室の設備上の問題だが、教室の後ろ半分の学生にとっては、天井からモニターが下がっていた方が見やすいように感じた。など

5. 成果と課題

今年度は、急な実施方針の転換や諸事情もあり、1学期にはピアレビューを開講できなかった点が課題であるが、2学期にベテラン教員から若手教員が学ぶ機会としてのピアレビューは大きな成果があったと考える。また、実際に若手教員以外の教員参加もあり、授業の進め方や受講生への問いかけ方等学ぶべき点が多く、非常に貴重な学びの機会となった。来年度はより計画的にピアレビューを実施し、人間関係学科の知を継承する土台を形成したいと考えている。一方で、これまでの新任教員によるピアレビューの実施も、自身の授業実践を振り返る貴重な場であることから、今後新任教員が着任した場合は、そちらも並行して実施したい。

2021年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	法学部	学科等	法律学科
--------	-----	-----	-----	------

2. 部局の実施方針、方法

法学部は、法律学科と政策科学科の2学科で構成されており、両学科ともに共通の実践を展開する事が多い。
FDのピアレビューに関してもこの法学部の伝統に則り、各学期・各学科から1科目を選んでピアレビュー実施を行う事を原則としている。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	民法入門	1	235	11			
2	社会法総論	2	331	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・1回の授業が前編と後編で各30～40分に分けて構成されていたので、疲労感が少なく、集中力を保ちやすい。
- ・前回の授業の復習から当日のテーマへの導入がなされており、学習内容の整理に役立っていると感じた。
- ・話し方や内容のおもしろさから、オンラインで長時間聞いても疲労感やストレスが少ないと感じた。
- ・学生の理解速度を意識して説明がなされていた。話の速度が適切である。
- ・ファイル自体を分割して学生の休憩時間を設けていたが、ファイルは1つのままで、間に休憩を指示する方法を実践されていて、このような方法もあるのだなどの気づきを得た。

5. 成果と課題

2021年度は、新任教員を中心にピアレビューを実施した。オンデマンド授業をピアレビューすることにより、オンデマンド授業における説明や教材の工夫などが共有された。遠隔授業は、来年度以降も行われる可能性があり、ピアレビューで共有された内容は、今後の授業において大いに役立てられようと思われる。

2021年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	法学部	学科等	政策科学科
--------	-----	-----	-----	-------

2. 部局の実施方針、方法

法学部は、法律学科と政策科学科の2学科で構成されており、両学科ともに共通の実践を展開する事が多い。
FDのピアレビューに関してもこの法学部の伝統に則り、各学期・各学科から1科目を選んでピアレビュー実施を行う事を原則としている。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	政治学	1	348	11			
2	環境政策論	1	80	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・本日の授業の内容を示す際、「発問」が示されており、学生にとって、その回の授業のテーマが分かりやすく、またテーマへの導入がされやすい形になっている。
- ・身近な時事的な話題から、徐々に学問的なアプローチになっており、学生の興味を引く授業展開が参考になった。
- ・アクティブ・ラーニングが非常にうまく活用されている。教員からの説明の後にアクティブ・ラーニングを入れることで、受講生が興味を持って課題に取り組み、授業内容を理解できる構成になっている。特に、アクティブ・ラーニングにおける手法の工夫が参考になった。

5. 成果と課題

1学期は、オンデマンド授業のピアレビューを実施し、2学期は、対面授業のピアレビューを実施した。特にアクティブ・ラーニングを活用した好事例をピアレビューすることにより、アクティブ・ラーニングの実践的な工夫が共有され、非常に有意義なピアレビューになったと思料する。

2021年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	地域創生学群	学科等	地域創生学類
--------	-----	--------	-----	--------

2. 部局の実施方針、方法

2020年度に引き続き、学群生向けの研修をアクティブ・ラーニングの手法の理解や習得に資するように設計し、ファシリテーターとして参加すること自体がFD研修に繋がるように実施した。その一つ「キャリアに関わる法律」をピアレビューした。
また、「i-Design」の授業をレビューすることで、一般の社会人向けのフィールドワークを伴う授業の工夫を学群の教員が共有することを目指した。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	地域創生実践演習	1	6	11			
2	キャリアに関わる法律	16	240	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

1) 様々な社会人が参加するPBLの工夫を学んだ。履修者の進度に合わせて随時カスタマイズすること、卒業生や学群のゼミ生が連携していること、学群や421Lab.、その他教員のネットワークを活用し、社会人学生それぞれの都合に合わせて複数の学習環境を提示していること。

2) 内定取り消しや不当解雇は、コロナ禍による経営不振により、大いに起こりうる問題であり、その対策を知らなければ就職活動中の学生も、入社後の卒業生も、泣き寝入りはもちろん、その後のキャリアに悪影響を及ぼす事は否めない。指導教員自身がこれらの知識を得る良い機会となった。

5. 成果と課題

成果は項目4にまとめた。課題について記す。

1) 毎年、多様な社会人が受講する以上、履修者の進度に合わせて随時カスタマイズすることは必要となる。結果、担当する教員のスキルやネットワークも更新していくことが望まれる。

2) 講師に親近感を持ってもらう工夫が必要。具体的には、北九州で活躍する女性弁護士として、最初の自己紹介やラストメッセージの部分だけでも、声だけでなく、ご本人に登場していただくなど。また、実際にあったキャリアに関わる事件の具体例の紹介が必要。電通の新人女性社員自殺事件や、大林組社員による就活セクハラ事件など。

2021年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	国際環境工学部	学科等	エネルギー循環化学科
--------	-----	---------	-----	------------

2. 部局の実施方針、方法

各曜日で公開することで教員の聴講を容易にした。多岐な講義内容で聴講できるよう、1-3年次に亘って工学基礎・専門の科目を公開した。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	基礎有機化学【化学】	2	51	11			
2	反応工学	1	30	12			
3	統計学【化学】	2	50	13			
4	有機化学II	2	44	14			
5	高分子化学	2	46	15			
6	化学平衡論	3	42	16			
7	環境分析化学	1	64	17			
8	反応速度論	1	44	18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

講義内容、進行などについて大きな問題の指摘はなかった。講義の工夫について、スライドそのままではなく所々が空欄になっており、説明を聞きながら自分で記入・完成させるような工夫がなされていることや板書や手描き図を学生に分かりやすいものとする工夫がなされていること、また、具体的な事例に基づき印象的な写真を示して講義進行をおこなっていること、などのコメントが多かった。

5. 成果と課題

各講義で共通して、教員がおこなっている授業に対する工夫がピアレビューを通じて他の教員が知ることができたことが大きな成果だった。しかしながら本学でピアレビューを始めてから数年が経過したため、実施が形骸化し、教員の熱意も薄れている。新規雇用の教員向けを別として、制度を再設計する時期に来ていると思われる。

2021年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	国際環境工学部	学科等	機械システム工学科
--------	-----	---------	-----	-----------

2. 部局の実施方針、方法

「対面授業と遠隔授業とでの教育効果の変化について、対面授業の様子から考える」を基本方針とした。

対面授業と遠隔授業との違いで、教育効果に影響する部分が何かあったのか、を明らかにしたいと考えた。そこで、授業評価アンケート結果で、学生の理解度が19年度と20年度とで大きく変化した科目の中から、過去のピアレビュー担当状況も勘案して、ピアレビュー実施科目を選定した。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	燃焼工学	12	62	11			
2	流体力学演習	9	49	12			
3	加工学	7	50	13			
4	流体力学II	12	47	14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

良かった点：

講義の最初に内容説明があり、わかりやすく導入されていた。学生が講義内容を聴きながら要点をまとめることができるプリントを配布していた。講義の中で授業内容に関連する身近な事例や製品、最新技術動向等を紹介し、学生に興味を持たせる工夫をしていた。毎回講義内容終了後に演習を行い、講義で習ったことの理解度を確実なものにしていた。

改善が求められる点：

マイクのノイズが入って聞きづらいところがあったため、録音機材などに改善の余地がある。動画など実際の画像や身近な話題がもっとあるとよい。学生とのやり取りがもう少しあった方がよかった。スライドを配布資料に書き写すだけでなく何か工夫があるとよい。

5. 成果と課題

一部の講義では、対面とオンデマンド形式の両方で行い、講義の後に演習を行った。しかしながら、今回のピアレビュー内容についてのコメントや改善意見は得られた一方で、昨年度の遠隔講義との比較はある程度しか行われず、中には今年度も遠隔方式で実施する他なかった講義もあった。今後再び遠隔講義が主体となる機会が生じるかは不明だが、その場合に向けての成果を十分に挙げることとはできなかった。

2021年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	国際環境工学部	学科等	情報システム工学科
--------	-----	---------	-----	-----------

2. 部局の実施方針、方法

新カリキュラムに切り替わった学年の科目群をピアレビューする方針をとっている。2021年度は3年次科目を対象とした。ただし、実験科目といくつかの授業科目は対象から外した。各学期の最初に該当学年の授業担当者に依頼して公開日の決定と重点項目設定シートの記述を行い、学科で共有した上で参観者を公募した。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	ソフトウェア設計論	3	80	11			
2	感覚と知覚の科学	1	65	12			
3	ネットワークとセキュリティ	1	77	13			
4	システム制御Ⅰ	1	78	14			
5	情報理論	1	65	15			
6	コンピュータアーキテクチャ	1	71	16			
7	システムモデリング	1	63	17			
8	システム制御Ⅱ	3	66	18			
9	集積回路設計	1	36	19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

今年度実施したピアレビュー対象科目は、どの授業科目も良好であることが意見・コメントから伺えた。また、参観者が詳細に渡って意見、コメントを述べている。
1科目について、多くの学生の前提知識の範囲の中に、学習内容の前提知識が収まっていないのではないかという指摘があった。

5. 成果と課題

新カリキュラムの科目群について、2021年度で一通りピアレビューを行うことができた。一方で、実験科目と大学院科目についてのピアレビューは新カリキュラムにおいて未実施である。2022年度にこれらの科目を中心にピアレビューを実施することとする。

2021年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	国際環境工学部	学科等	建築デザイン学科
--------	-----	---------	-----	----------

2. 部局の実施方針、方法

本学科のピアレビュー方針は、

「可能な限り大学院や授業評価アンケートの高い授業のピアレビューを行う」

である。なお、概ね以下の方法でピアレビューを実施した。

- 1) 授業公開する教員（公開教員）は、授業公開を告知するとともに、重点項目設定シートに基づいて重点項目およびその具体的な取り組み内容を決める。
- 2) 授業を参観する教員（参観教員）は、公開教員が作成した重点項目設定シートに基づいて、公開された授業に対する評価を行う。
- 3) 公開教員は参観教員の評価に基づいて実施報告書を作成する。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	見学WS演習I	2	49	11			
2	環境設備基礎	1	57	12			
3	建築材料実験 (No. 4と公開者が異なる)	2	50	13			
4	建築材料実験 (No. 3と公開者が異なる)	2	50	14			
5	建築景観デザイン工学	2	55	15			
6	環境設備実験	1	27	16			
7	建築エンジニアリングプラクティス	1	25	17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

出された主な意見は、以下に示すような肯定的な意見が多く見られた。

- ・考えて議論させるようにさせており、そのシステムが何故採用されるのかという根本についての理解が深まるようにされていた。

- ・実験データの解析方法をipadを投影して丁寧に説明していた。

- ・過去の授業内容の復習を盛り込み、学生の理解度に応じた解説が行われていた。

- ・授業の内容は手書きのメモによって記録させ、その提出を行うとともに、翌週までに絵に起こすという復習作業を実施することで、理解を段階的に重ねる工夫がなされていた。

- ・パワーポイントで見学先の写真やシステムの概要を事前に説明し、当授業の意義付けを行い、学生の意欲を高めていた。

5. 成果と課題

ピアレビュー参加率は、昨年度（2020年度）が64.3%であったものの、今年度（2021年度）が100%であった。各教員がより良い授業運営に対して意識を高く持っていることが伺える。評価コメントなどは、全体的に高評価である一方、学生目線で考えた場合、授業の進め方に理解が難しいなどの意見に対しては、次年度に向けた改善点が示されていたことからピアレビューを実施した意義があったかと思われる。

次年度以降、まずは、「ピアレビュー参加率100%」を維持していくことが課題の一つとしてあげられる。

2021年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	国際環境工学部	学科等	環境生命工学科
--------	-----	---------	-----	---------

2. 部局の実施方針、方法

授業設計についてピアレビュー実施前に周知させた上での授業公開を実施する。特に、分野横断的な科目を対象にピアレビューを実施する。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	環境分析実習 (1)	6	47	11			
2	環境分析実習 (2)	2	47	12			
3	基礎有機化学	1	48	13			
4	生命科学分析	1	48	14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

教員・E A・T Aが細かな指導をできる体制となっており、実技指導の効果が高まっている。

学生の積極的な参加が促進される仕組みづくりができていた。

講義の位置づけを明確にしてから、講義の本題に入るなど分かりやすい説明を心がけた講義となっていた。

昨年度のオンライン授業に比べての教育効果改善ができています。

5. 成果と課題

分野横断的な講義や実習を中心にピアレビューを実施した。オムニバス形式の講義では、同一のトピックであっても研究分野が異なればその紹介の仕方も異なってくるため、多くの教員が参加し、教育方法を共有することでより有意義な議論が可能となる。学科のほぼ全教員が授業公開・参観をしているものの、各回における参加人数は少なかったことから、今後のピアレビューではより積極的な参加を促す必要がある。また、講義全体を通して参観することでさらに有意義な活動になることが期待される。

2021年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	基盤教育センター	学科等	
--------	-----	----------	-----	--

2. 部局の実施方針、方法

遠隔授業実施の場合は授業動画を通して、対面授業実施の場合は従来通り教室での参観を通してピアレビューを行った。また、それとは別で9月に実施された部局内FD（オンライン開催）の中で参加教員が互いの授業について話し合える機会を設けた。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	社会哲学入門(高木)	1	遠隔	11	経済入門Ⅱ（中岡）	1	36
2	Communicative English IV（マーフィ）	1	35	12	英語Ⅲ（筒井）	1	21
3	Communicative English IV（ミン）	1	32	13			
4	Communicative English IV（ミン）	1	35	14			
5	Communicative English II（團迫）	1	27	15			
6	倫理思想史（高木）	1	遠隔	16			
7	異文化理解の基礎（神原）	1	遠隔	17			
8	社会学習インターンシップ（村江）	1	6	18			
9	考え方の基礎（村江）	1	49	19			
10	言語・認知・コミュニケーション（植田）	1	247	20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・[対面]学生同士で話し合う時間を作ったり、学生の興味を引く話題を取り上げていた。
- ・[遠隔]受け付けたコメントを「コメント返し」の別動画として、授業内容を深く知りたい受講生向けコンテンツを準備していた。
- ・[対面] The language input was varied in source. Good usage of YouTube. Audio files were embedded in the PowerPoint presentation used to review and present homework.
- ・[遠隔]ゲスト講師と教員が対話するスタイルが新鮮だった。

5. 成果と課題

- ・改めて学生目線で準備実施された授業は良いものだ、ということである。
- ・コロナ感染症の影響により、授業内外での学生と教員とのコミュニケーションを上手に行えるようにしていくことは、引き続き大きな課題であると感じている。
- ・意見は様々だとしても、遠隔授業を経験したことで、対面授業の幅が広がり教員自身のスキルアップに繋がったと考える。

2021年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	社会システム研究科	学科等	
--------	-----	-----------	-----	--

2. 部局の実施方針、方法

(1) 方針：「社会システム総合概論」をピアレビュー科目として設定する。
 本科目は、「東アジア」「文化言語」「地域コミュニティ」「現代経済」専攻の教員（各1名）によるアクティブラーニング形式の授業である。科目の目的は、専門領域にのみ関心が向きがちな大学院生に各専攻の枠を超えた複合領域的な視点と発想を持たせることにある。その実践を改善するとともに、同様の視点を指導教員も確認する。

(2) 方法：院生が本科目の実施形式に慣れた段階（1学期後半）で各専攻からの教員によって実施する。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	社会システム総合概論	5	18	11			
2				12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

「大学院での研究について」のテーマで自分の体験に沿って話すと、学生も身構えずに聞きやすいと、勉強になった。研究を志す大学院生にとって、ただ現時点での研究の問いだけに着目するのではなく、その背景にある“自分自身が生きる中で問い続けていること”、そこにも焦点を当てる意味が確認できたように思う。先行研究の理解を深めるとともに、そのプロセスの中に自身の研究を定位させていくことの重要性が再確認できた。「他人が目を向けてないところに目を向けてみる」「資料を何度も読み返す」「当たり前と思わずに、虚心に向かい合う」など、研究の心構えとして共鳴する点が多々あった。

5. 成果と課題

(1) 成果：昨年度は新型コロナウイルス感染対策のためオンデマンド授業の視聴を行ったが、今回はピアレビューにともなう人数増を踏まえて新型コロナ感染防止のため通常の授業より大きな教室で行われた。今回は「大学院での研究について」というテーマであったが、先行研究の中に自らの研究の事例を説明して発展を当てはめていく方法は具体的であった。

(2) 課題：受講生が質問したり、意見交換する時間を取れなかった。

2021年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	法学研究科	学科等	
--------	-----	-------	-----	--

2. 部局の実施方針、方法

平成29年度より法学研究科でもピアレビューを適切に実施することとしているが、現実問題として在籍している院生数が少なく加えて論文指導科目はピアレビューに適さない。よって各学期で1科目のみ実施することとしている。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	政策調査法	1	2	11			
2	憲法BIV	1	1	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

法律学と政策科学では、用いられるメソッドがまるで違う部分がある。法律学は、法という人の作り出した規範の論理性を追求するという側面があるが、政策科学は具体的な問題に対して統計や数値などを基に実証的な解決を模索するという特色がある。とはいえ、両者はいわば車の両輪とも言える関係にある。法律学者の目線で政策科学の手法の一端に触れることで、現実の社会問題を効果的かつ効率的に解決するために法律学と政策科学とが協同することの重要性に気づくことができた。

学生の質問を出発点として学術的な議論のアプローチを示すといった授業方法が、大学院における少人数授業の展開方法として大変参考になった。

5. 成果と課題

学問分野の特性に合った教育手法について情報共有がされた。法律学科教員と政策学科教員は、大学院レベルでの交流は少なく、大学院における教育手法の相互参照が行われたのはきわめて好ましいことであったと思料する。また、大学院教育における授業方法や教育上の工夫を取り入れる良い契機になっていた。

2021年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	マネジメント研究科	学科等	
--------	-----	-----------	-----	--

2. 部局の実施方針、方法

- ・基本的にどの講義も教員がお互いに自由に聴講できるという了解のもとで運営している。ただしマナーとしては、事前に担当教員に連絡することを申し合わせている。
- ・今年度のピアレビューは、基本的にはFD委員2人が分担して、新任教員の担当講義・新規開講講義を対象に実施した。
- ・ピアレビューの結果は、FD委員会で報告し教育内容・方法の改善を図ることとしている。
- ・また、平成26年度からは、本ピアレビュー結果を授業アンケート結果とともに対象となった講義担当教員に送付することとしている。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	マーケティング	1	30	11			
2	イノベーション戦略	1	20	12			
3	NPOマネジメント	2	8	13			
4	M&Aと戦略的提携	1	11	14			
5	アントレプレナーシップ	2	17	15			
6	マネジメントアカウンティング	2	6	16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・体系的・構造的な講義設計
- ・デザインとストーリーに優れた授業資料
- ・実務経験や研究成果などに基づいた解説や討議
- ・双方向性などの工夫がもう少し欲しい
- ・ワークなどアクティブ・ラーニングの要素を取り入れてほしい

5. 成果と課題

- ・新任教員の方々には、体系的な講義設計の下、充実した資料を準備した上で、実務経験や研究成果に基づいた丁寧な講義をしていただいた。
- ・今後は双方向性やアクティブ・ラーニングを意識することで、さらに充実したものになると思われる。ピアレビューやアンケート結果、FD研修を通じて授業改善に努めていただき、FD委員を中心にフォローする。
- ・特任教員のピアレビュー参加をお願いし、全体としてレベルアップを図りたい。
- ・遠隔講義や対面講義、ハイブリット講義に関する諸情報を蓄積共有し、適切な組み合わせなどについて検討する。
- ・近年の課題である学生の多様化への対応を含めた講義方法などについての検討が課題である。

第 4 章

2021 年度 特集記事



【2021 年度特集】 アフターコロナだからこそできる、 授業の工夫例

取材・編集：2021 年度 FD 委員会・FD 活動広報ワーキンググループ

胡玉華（外）、岡本舞子（法）、市原勇一（経）、柳川勝紀（国工）、見館好隆（地域研）

特集の目的と CONTENTS

2020 年度のオンラインを経て、アフターコロナだからこそ 2021 年度の第一学期にリアルで実践した、もしくは 2021 年度第二学期に実践中の授業の工夫について、北方キャンパス 5 学部・学群各 1 名、基盤教育センター1 名、そしてひびきのキャンパス 1 名の教員に対しインタビューを行い、まとめました。読者の皆様の今後の FD 活動にご活用ください。

1. 鳥谷 まゆみ（外国語学部中国学科）「中国作品講読Ⅱ」
2. 市原 勇一（経済学部経営情報学科）「原価計算論Ⅰ・Ⅱ」
3. 田部井 世志子（文学部比較文化学科）
「英米文学概論Ⅰ（旧：イギリス文学概論）」
4. 中村 英樹（法学部法律学科）「日本国憲法」
5. 村江 史年（基盤教育センターひびきの分室）
「環境問題特別講義、環境問題事例研究」
6. 片岡 寛之（地域創生学群）
「地域創生論Ⅰ（まちづくりマネジメント）」
7. 廣渡 栄寿（基盤教育センター）
「アカデミック・スキルズⅠ」

※本特集で用いている写真はすべてイメージです（フリー素材）。

1. 鳥谷 まゆみ（外国語学部中国学科）

「中国作品講読Ⅱ」 配当年次：2 年次（第二学期・必修）、受講者数：20 名

授業内容

本授業は、中国現代文学作品の講読授業である。中国語の基本的な文法や語彙を習得した学生を対象に、20 世紀中国の

五四新文化運動から中華人民共和国建国までの文学運動史を俯瞰しながら、多様なジャンルの中国語作品の講読を行う。はじめピンイン付き(部分)のテキストを使用して文章語に慣れ、段階的にピンインがついていない原文を読む。特に翻訳技術の向上を目指すとともに、作品の文化的、社会的背景について学習する。

2020 年度	オンライン(オンデマンド)
2021 年度	教室(対面式)とオンライン(ライブ形式)によるハイブリッド ※オンラインは韓国在住本科生一名を対象とする
2022 年度(予定)	教室(対面式)

コロナ禍に際し、特に工夫したこと

成績評価の対象となる課題の工夫。本授業は、事前配布の原文プリントの予習を必須としている。そのため、受講生は予習に一定の時間を費やさねばならないのだが、コロナ禍、オンライン授業の実施によって、本授業の予習、課題に費やす時間が大幅に増加することとなった。そこで本授業では、予習ノートの画像を提出してもらったほか、Zoom のブレイクアウトルームでのディスカッションや Web での小テスト実施など、多様な課題を出すよう工夫した。後述する協働活動によるアクティブ・ラーニングもその一例である。

結果、うまくいったこと

課題実施にかかる時間を短縮できたことから、課題の提出率が向上した。この結果はアンケート内容および学生からの感想に基づいている。

結果、うまくいかなかったこと

受講生によってコンピュータスキルやネットワーク環境にばらつきがあり、少数ながらも課題を上手く提出できない者がいた。学生のコンピュータスキルの底上げ、ならびにネットワーク環境の整備は課題である。

コロナ禍を経験したからこそ、授業改善の学び

本授業では、受講生の負担削減を目的に前述(「コロナ禍に際し、特に工夫したこと」)の如き工夫をこらした。このことによって、受講生が課題に取り組む時間と理解度がある程度可視化できたことは評価できるだろう。今後は理解度に応じた課題内容の工夫をしたい。その場合、成績評価の方法についてもセットで検討する必要がある。

コロナ禍で得た学びを、授業改善にどう活かすか？

コロナ禍によるオンライン授業実施によって、受講生同士が交流する機会は皆無であった。そこで、ICT ツールを活用して、協働活動によるアクティブ・ラーニングを取り入れることにした。具体的には、受講生をグループ分けして、グループごとに精読したい作品をひとつ決定してもらい、メンバーで朗読、翻訳、文法解説、考察とそれぞれ担当を決めて、Zoom のブレイクアウトルームや LINE グループでディスカッションを重ねてもらった後、それを Teams で発表するというものである。全グループの発表終了後、グループのリーダーが Teams チャットに投票して、個人・グループの優秀者を決定した。

同様に、2021 年度のハイブリッド授業でも ICT を活用したアクティブ・ラーニングを取り入れた。円滑なハイブリッド授業実施のため、高機能のカメラ内臓スピーカーを導入した。毎回、その設置準備に相応の時間を要したものの、互いの顔を見ながらの双方向のやりとりは比較的スムーズであり、受講生たちに概ね好評であった。

以上のような授業によって、受講生は受動的ではなく、主体的に学ぶ喜びを感じていたようである。受講生からは、従来ほとんど交流をもたなかった学生とディスカッションすることができて楽しかったとの感想を得られた。

2022 年度の授業でも協働活動によるアクティブ・ラーニングを取り入れたいと考えている。(文責：鳥谷まゆみ)

2. 市原 勇一（経済学部経営情報学科）

「原価計算論Ⅰ・Ⅱ」 配当年次：2 年次（第一学期／第二学期／選択）、

受講者数：77 名（Ⅰ）、46 名（Ⅱ）

授業内容

原価計算論Ⅰ・Ⅱでは、製品やサービスの価格決定の基礎ともなる原価の計算方法および流れについて学習する。日商簿記検定試験 2 級の内容を基礎とし、一部 1 級の内容も含んでいる。

2020 年度	オンライン(オンデマンド)
2021 年度	教室(対面式)
2022 年度(予定)	教室(対面式)

科目特性上、「実際に計算をしてみる」ことが内容理解・知識定着に効果的であるため、授業内容を一通り説明した後、受講生に例題を解いてもらうようにしている(毎回 1～3 題×10 分程度)。また、受講生のほとんどは実務経験がなく、製造業の生産プロセスをイメージすることが難しいため(原価計算の手続きは製造業の生産プロセスを基礎としている)、料理やお菓子作りといった受講生にも身近な物事にたとえるなど、内容理解につながるような工夫を行っている。

コロナ禍に際し、特に工夫したこと

《原価計算論Ⅰ・Ⅱ共通》

前述した通り、当該科目では「実際に計算をしてみる」ことが重要であるため、受講生の学習を促すため、2020 年度は毎回課題(計算問題が中心)を課し、成績評価の一部とした(出欠確認も兼ねる)。課題の解答・解説は、授業動画とは別に録画・アップロードすることで、受講生が復習を行いやすいように工夫した。2021 年度は対面式となったため、毎回の課題は課さず、代わりに練習問題および解答・解説を Moodle にアップロードするようにした(任意、成績評価には反映せず)。

オンライン(オンデマンド)形式となった 2020 年度は、期末定期試験における不正行為対策として、数値のみを変えた問題を複数用意し、受講生によって出題される問題が変わるように工夫した。

《原価計算論Ⅱ》

原価計算論Ⅰ・Ⅱを続けて履修することを推奨しているが、原価計算論Ⅰを履修せずに原価計算論Ⅱを履修している受講生が一定数いる(2 割程度と思われる)。彼ら・彼女らのために、原価計算論Ⅰの授業動画および資料を共有し、授業内で適宜それらを確認するように指示している(例えば、「この内容は原価計算論Ⅰの第○回の内容と関連しているので、そちらの授業動画と資料も確認しておいてください」といった具合に)。原価計算論Ⅰの授業動画および資料は、原価計算論Ⅰ・Ⅱを続けて履修している受講生にも共有しており、彼ら・彼女らも復習に利用することができるようにしている。

結果、うまくいったこと

オンライン(オンデマンド)形式の場合、授業動画をいつでも見返すことができるため、期末定期試験前などの復習に利用できる点が受講生に好評であった(当該科目の内容・特性とも相性がよかったと思われる)。特に、原価計算論Ⅱで原価計算論Ⅰの授業動画・資料を共有している点は受講生から高く評価された。

結果、うまくいかなかったこと

2020 年度は、毎回の課題、小テスト、期末定期試験をすべてオンラインで実施したが、不正行為を完全には防ぐことができなかったと考えている(Moodle の仕様の問題かもしれないが、真面目に解答すれば十数分かかる問題を 1 分未満で正解している受講生が複数名現れた、など)。

また、授業動画を視聴後に課題に解答するよう指示していたが、授業動画を視聴せずに課題に解答する受講生が毎回一定数おり、授業動画を視聴するよう受講生を上手く動機づけることができなかった。

コロナ禍を経験したからこそ、授業改善の学び

オンライン(オンデマンド)形式の授業は、(インターネット環境さえあれば)授業動画をいつでも、どこでも視聴できることから、受講生の学習環境や理解度にあわせて柔軟な受講が可能な点が大きな利点であると思われる。

る。この利点は、アフターコロナも十分に活用できると考えられ、当該科目では、実際に原価計算論Ⅱの受講生に対し、原価計算論Ⅰの授業動画・資料を共有することで、受講生からも高い評価を得ることができた。

一方で、自学自習の習慣が身につけていない受講生にとっては、そもそも毎週授業動画を視聴したり、毎回の課題に取り組むといったこと自体が難しく、オンライン(オンデマンド)形式の利点を十分に享受できなかったのではないと思われる。翻って、授業を提供している教員の立場からみれば、受講生が授業動画を視聴したり、毎回の課題に取り組むように動機づけるための工夫を行う必要がある(当該科目では、これが十分にできなかったと考えている)。

コロナ禍で得た学びを、授業改善にどう活かすか？

前述の通り、2021年度は2020年度の経験をふまえ、原価計算論Ⅱにおいて、受講生が自学自習や復習に取り組めるよう、原価計算論Ⅰの授業動画・資料を共有した。この取り組みには一定の効果があり、また受講生からも高い評価を得ていることから、2022年度以降も同様の取り組みを継続したいと考えている。ただし、このように過去(特に過年度)の授業動画や資料を共有できるようにするには、授業内容を標準化する(年度によって授業内容がバラつかないようにする)必要があるため、次年度に向けて授業内容の見直しも行っていきたい。

また、受講生に対する動機づけについても改善の余地が大きいと考えている。アフターコロナは、当該科目も含めて多くの科目が対面式に戻られると思われるが、受講生が毎回の授業に出席するように動機づけるためには、受講生が当該科目を履修した理由について把握するとともに、当該科目を受講することで得られる知識が実務にどのように役立つのかという点をより強調し、コロナ禍では実施が難しかった実務家を招聘しての講演などもより積極的に授業に取り入れたいと考えている。

(インタビュアー：畔津憲司、文責：市原勇一)



3. 田部井 世志子（文学部比較文化学科）

「英米文学概論Ⅰ（旧：イギリス文学概論）」

配当年次：文1年次（第一学期・選択必修）、英米2年（第一学期・教職の中で必修）

受講者数：合計約150名

授業内容

本講義では、長い歴史の中で詩から劇、そして小説へと発展してきた伝統あるイギリス文学の始まりから説き起こし、今日に至るまでの流れを追います。代表的な作品群については原作の豊かな英語表現にも触れることで、作品のおもしろさを共に味わうことを目指しています。具体的には、作品に関わるジャンルや技法、また読み解き方や批評方法などの基礎的な説明を加え、更には作品を生み出したイギリスの時代背景、文化背景との関わりをも探っていくことで、作品のより深い読みを目指します。同時に、作品との関連で、人間に関する様々なテーマ（生、死、愛、宗教、想像力…）についても問題提起をします。

2020年度	オンライン(オンデマンド)
2021年度	教室(対面式) ※一部オンライン(オンデマンド)
2022年度(予定)	教室(対面式)

コロナ禍に際し、特に工夫したこと

動画は、パワーポイントを用いてナレーションを吹き込み、ストリーミングにアップロードする手法を用いた。教室実施の時には小さいカード(コメントカード)を授業終了時に提出させ、それに手書きでフィードバックを記入し、まとめて印刷し、次の授業で配布していた(匿名、採点対象ではない)。2020年度は、それをMoodleの🔗マークのフィードバックで集め、エクセルで編集し、Moodleにアップすることで共有した(匿名)。学生たちにはお互いにコメントを読み合い、感想や意見を次の授業後のコメント、あるいは課題レポート等に反映するよう促した。オンデマンドでは学生同士の意見交換の場を作りにくいので、コメントの共有は特に重要だと考える。

結果、うまくいったこと

授業の流れが良くなったと感じている。なぜならば教室実施の時にはよく脱線していた(良い点もあるが、脱線が多くてわかりにくいというコメントもあった)が、オンデマンド動画では脱線するなら「ここは閑話です」とスライドに明示して話していたため、スムーズになり、わかりにくいというコメントはなくなった。また、板書がパワーポイントになったことで、手書きより読みやすくなったと思う。同時に手書きだったフィードバックも、Moodleの🔗マークのフィードバックで集め、エクセルで編集することで、手書きのコメントより読みやすくなったのではないかと考える。さらに動画を見直すことができることから、学びが深まったことが考えられる。

結果、うまくいかなかったこと

まず、私自身が動画作成やMoodleの活用について、当初混乱した。しかし、逆に自分自身の教育ICTツールの活用スキルが上がったと思う。このことは、新人教員研修にもつながると思うので、特にMoodleの使い方については希望者に、研修会を開くなどしてもらった方が良いのではないだろうか。次に、私が重要だと考えているノートテイキングについては、オンデマンドで促すのはほぼ不可能だと思う。教室で対面実施するからこそ、学生がノートを取りながら思考する授業が作れることに改めて気づけたと思う。

コロナ禍を経験したからこそ、授業改善の学び

従来、板書で授業を行っていたが、今年度から板書を辞めてパワーポイントを使っている。その際、パワーポイントのノート機能を活用することで、板書の時にはアドリブで行っていたことを、パワーポイントのノートを観ながら話すことで、漏らさず伝えることができるようになった。また、発音練習を伴う授業については、Teamsを使って行った方がスムーズにできたので、マスク着用の授業が続く場合、回によってはあえてオンライン開催するのも有用ではないかと考えている。手書きのコメントカードについても2020年度同様、Moodleの🔗マークに移行し、フィードバックにかかる作業時間を短縮できている。さらに、オンラインの時に作った動画作成用のパワーポイントを、少し修正してアップすれば、事前・事後学習などにそのまま使えるのではないかと考えている。

コロナ禍で得た学びを、授業改善にどう活かすか？

授業の個性というか、教室だからこそ実践できる、教員個々の様々な工夫やオリジナリティが無ければ駄目だということを、コロナ禍で改めて学ぶことができた。

イギリス出身の或る小説家・詩人は作品の中で、機械文明の発展に伴い人間性が損なわれていると警鐘を鳴らしているが、オンラインの有用性を活用しつつも、教室における対面式の授業だからこそできる、人間性を培う場としての授業の在り方の重要性を強く感じる機会にもなった。また、先日学部のFD活動においてZoomのブレイクアウトルームを使い、「学生との接し方」について教員同士で意見の共有を行ったが、そこでもオンラインを経験したからこそ、たくさんの気づきを得て、自らの授業改善に活かせるといった意見が多く出されていた。

故・立川談志さんの独演会に来た客が、長時間居眠りをしたことで独演会が中断。主催者側は客を退席させ、それを不服とした客が主催者に慰謝料10万円の支払いを求めた裁判がありました。結果、裁判官は判決で、「客の居眠りは程度によっては演者の意欲をそぎ、演目の続行の重大な障害になる事もありうる。」として客の訴えを棄却しました。この判例が授業に当てはまるかはわかりませんが、私も立川談志さんのように、(ノートテイキングの質を高めることを意識して)学生との協働の場として、教室での授業に臨みたいと思います。

(文責: 見館好隆)



4. 中村 英樹（法学部法律学科）「日本国憲法」

配当年次：1 年（第二学期・選択）、受講者数：約 130 名

授業内容

国家の基本法といわれる憲法に関する基本的な考え方を学ぶ。受講対象者を考慮して、日本国憲法全体を通観するのではなく、いくつかの重要テーマを取り上げて講義する中で、憲法学の基本的な考え方や社会との関係などを学べるように努める。

2020 年度	オンライン(オンデマンド)
2021 年度	教室(対面式)
2022 年度(予定)	教室(対面式)

コロナ禍に際し、特に工夫したこと

従来は、板書＋資料のみ配布(レジュメ配布なし)という方式で授業をしていたが、コロナ禍では、パワーポイント＋レジュメ配布で授業をする方式に変更した。

オンデマンドのとき(2020 年度)には、パワーポイントに、関連する人物や判例にちなんだ画像をたくさん盛り込み、視覚的に理解し、具体的にイメージできるように工夫した。また、メールで質問を受け付けたところ、多くの質問が寄せられた。質問は次回の授業で紹介し、回答も共有した。特にオンデマンド時には、できるだけフィードバックしてあげたいという思いで取り組んでいる。学生の質問を紹介することで、他の学生がこういう質問をしているのかという気づきを得て、学生が質問しやすくなる面もあると思われる。レジュメに関しては、一定時間説明が続いたようなタイミングで、穴埋め部分を作っておき、学生の集中力を切らさないような工夫をした。

2021 年度、対面になってからも、パワーポイントとレジュメ配布という形で授業を行った。レジュメは、授業前に早めに Moodle にアップし、各自で印刷してもらうようにしており、学生が早めに準備できるようにしている。また、授業で使用したパワーポイントを、授業後に、音声なしの動画にして、Stream にアップしている。欠席した学生でも、その動画を見て、レジュメの穴埋めはできるようになっており、また、ノートが十分に取れなかった学生や復習したい学生がゆっくり動画を見て、復習することもできる。動画は、1 回の授業につき、5 分以内ほどの長さである。動画は、毎回、30 回ほど(多いときは 40 回ほど)再生されているので、学生に有効に活用されているものと思われる。

結果、うまくいったこと

動画を授業後に見ることができることや穴埋め式のレジュメは、学生に好評だった。対面になって以降もレジュメを Moodle にアップしているが、学生の出席率はいい。

学生の質問を授業で紹介し、回答を共有するのは、学生の興味を引くようである。対面授業の際には、オンデマンドの時よりも質問が出にくい傾向があるが、前年度のオンデマンド授業の時に出了た質問とそれへの回答も、パワーポイントに盛り込むことができたので、対面での質問の出にくさをフォローすることができた。

また、板書での授業をしていたときよりも、板書時間がなくなったことと、パワーポイントに多くの情報を盛り込むことができるようになったことで、授業の内容容量が 1.5 倍ほど増えた。

結果、うまくいかなかったこと

レジュメを学生が印刷するようにしているため、印刷の負担が気になっている。また、レジュメの記述に誤りがあったときに、授業中に修正を指示し、Moodle でも修正を周知するなど、修正の周知に苦労したので、注意が必要だと感じた。

課題に関して、オンデマンドの時には、書き込んだレジュメを撮影して送るという課題を 2 回出したが、1 回目はファイル形式を限定していなかったため、ファイルが開けないなどのトラブルが生じた。2 回目はそれを踏まえ、ファイル形式を限定したことでトラブルを最小限に抑えることができた。

コロナ禍を経験したからこそ、授業改善の学び

書き込み式のレジュメが意外と好評だということが分かった。また、いつ対面からオンデマンドになっても対応可能なように、オンデマンド時に作成したパワーポイントを対面授業になっても活用したが、パワーポイントを活用することで、より詳細な内容を、ビジュアル的にも理解しやすい形で伝えることができた。

コロナ禍で得た学びを、授業改善にどう活かすか？

上述の工夫を継続し、パワーポイントを最大限活用していきたい。オンデマンドでは、いかに飽きずに見てもらうかの工夫が大事だが、対面でも、同様の工夫は必要であり、説明が続くタイミングで、学生の作業(レジュメへの書き込み等)を入れるなど、様々な工夫を継続していきたい。学生からの質問への回答も、学生の関心を引くため、引き続き、授業のパワーポイントに組み入れていく。

授業方法や試験方法の変更に伴い、評価方法も、工夫や変更が必要かもしれない。その点は、今後検討していきたい。

(文責:岡本舞子)



5. 村江 史年（基盤教育センターひびきの分室）

「環境問題特別講義、環境問題事例研究」

配当年次：1 年（第一学期（環境問題特別講義・必修）／第二学期（環境問題事例研究・必修）、受講者数：約 250

授業内容

環境問題特別講義(1 学期)および環境問題事例研究(2 学期)は国際環境工学部全学科を対象とした学科横断、分野横断、文理融合の必修科目という位置付けである。環境問題特別講義では、SDGs、過去の公害克服の歴史、市の取り組みを紹介しつつ、社会的課題に対しての取り組み事例に関して外部講師から話題提供を受け、受講生の世界観が広がる講義設計を意識している。環境問題事例研究では、分野横断型の課題に対し、学科横断型の少人数チームごとに、研究計画書を作成し、調査研究活動を進めるといった実践的な内容である。調査研究活動では、専門知識を有した教員によるフィードバックを受けつつ、PDCA サイクルを繰り返し、プレゼンテーションに向けての準備を計画的に進める。双方の科目を1 年次に一年間を通して履修することで、大学で専門科目を学んでいくための動機づくりと基本的なリサーチスキルの習得を目指したものである。

2020 年度	オンライン(オンデマンド)
2021 年度	オンライン(オンデマンド)
2022 年度(予定)	オンライン(オンデマンド)

コロナ禍に際し、特に工夫したこと

約 250 名と大人数の大講義科目かつ1 年次の必修科目であることから、積極的な態度で臨めない学生へのフォローアップが可能となる体制作りを特に意識している。例えば、環境問題事例研究は木曜の2-5 限に開講されているが、午前中はオンライン講義とし、研究計画書、グラフ、プレゼン資料の作成方法、個人課題に関する説明などを実施している。そして、午後はグループごとの活動時間としている。グループワークでは、5 人程度の少人数グループを作って、教職員もしくはTA で取り組み状況をチェックすることで教育の質を保っている。Teams チャット上で毎回の進捗が目に見える形で提示させ、チェック側はコメントを返したり、「いいね」をつけるなど自然かつスムーズなやりとりをすることで受講生の自発的な学習が継続するような仕組みづくりをしている。これが実現できているのは、十分な人数のTA を配置できていることも大きい。そして、午前の内容については個人課題、午後はグループ課題と、二つの課題を毎週提出させるようにしている。

結果、うまくいったこと

本講義を担当することとなったのは2020 年度からであるため、コロナ前との比較は難しい。少なくとも、プログラミング言語 Python を用いた学習や teams のチャットを活用したグループワークは前任の先生が担当されていたときは大きく異なる点である。Python の学習に関しては、個々人のスキルや理解度によって進捗が大きく異なってくる。そのため、対面での講義よりもオンライン講義の方が適していると判断している。また、グループワークに関しては、前述のとおり、受講生の取り組み状況を詳細に把握することに成功していると感じる。また、teams のようなオンラインでの意見交換の場は受講生にとっても有用であり、グループごとの裁量で柔軟に計画を立て調査を進められる点は好評であった。

結果、うまくいかなかったこと

環境問題特別講義で実施した Python の学習では、福岡管区気象台からの過去 50 年の気温データを取得して、それをグラフで図示させるなどの基本的データ解析を扱ったが、これが不得手な学生も少なからず見られた。アフターフォローとしては、夏季休暇期間に講義内容の復習や発展的な学習ができるような教材を本講義の分担者である中武先生が中心となって用意している。また、グループワークでは活動的なところとそうでないところとの差が大きくなってしまった。参加者の集合時間、場所など具体的に指示しないと動いてもらえないこともある。このような学習の習慣作りからしっかりフォローしないといけないこともあり、その点は課題である。なお、グループ分けの仕方でも現状は希望を優先させているが、これもより良い方法があるのかもしれない。また、一度グループから離れてしまった学生をフォローアップできるよう、2020 年度は全体チューターというものを設けた。しかし、今年度は取ってそれを用意していない。試行錯誤を続け、より良い体制を作っていきたい。

コロナ禍を経験したからこそ、授業改善の学び

2020年度のグループワークが活発に進まなかったことを反省材料に、今年度はグループ分け直後に環境ミュージアムでの見学を実施した。その意図は対面で顔が見える状況を作ること、その後のグループワークがスムーズに進むことを期待してのものである。実際に会ったことのない相手とのグループワークはどうしても壁があると感じる。

前述したように、Python 学習に躓いた学生へのフォローとしては、夏季休暇期間にオンライン教材を提供している。また、「未来地域産業インターンシップ」という企業インターンシップも夏期に提供している。これらの課外活動は対面での学びを補う大きな役目をしていると感じる。講義の枠を越えた学習ができるような繋がりが他の科目でも複数提供されるようになれば、それらが有機的に関係しあうことによる相乗効果も期待できる。

コロナ禍で得た学びを、授業改善にどう活かすか？

来年度もメディア授業として申請している。本講義はコロナに関係なく、オンラインで実施することに利点を感じる。また、今後はフィールドワークをより積極的に取り入れていきたい。例えば、企業へのヒアリングを環境問題事例研究で取り入れているグループがあるが、そういった活動は積極的に推奨したい。フィールドに赴くときのマナーやルールなどは環境問題特別講義の中で説明しているので、それらと紐付いた研究調査活動ができるとういと考えている。

(文責:柳川勝紀)



6. 片岡 寛之（地域創生学群）

「地域創生論Ⅰ（まちづくりマネジメント）」

配当年次：1年次（第一学期・必修）、受講者数：約120名

授業内容

本授業のテーマは「経営からまちづくりを考える」。まちづくりの活動を行う際に直面する5つの悩み（①何をしたらよいかわからない、②どう実行したら成果が出るのかわからない、③実行する人がいない、④手元に予算がない、⑤常に時期が遅れる）を解消するために、「まち＝1つの会社」、「まちづくり＝事業」として捉え、経営的視点からまちづくりについて考えることを目指しています。

2020年度	オンライン（同時接続）
2021年度	教室（対面式） ※一部オンライン（同時接続）
2022年度（予定）	教室（対面式）

コロナ禍に際し、特に工夫したこと

オンラインにより学生の孤立感を減少させるために、特に教員と学生とのコミュニケーションの質と量にこだわった。同時接続には Teams を使ったが、2020年度はブレイクアウトルームが使えなかったためチャットのみ利用し、それ以外はイベントや会議などでインタラクティブに Q&A やライブ投票を行えるクラウドサービス「sli.do（スライドゥー）」を活用した。具体的には、授業への意見や質問をさせる時に sli.do を使うことで、学生は他の学生のコメントを共有でき、賛同するコメントに「いいね」を押すと、その数が多いコメントが上位にソートされるため、学生の良いコメントを選びやすく、学生自身も他の学生のコメントを通して授業への理解が深めることができた。また、事後の課題は Moodle のフォームを用いて提出させ、Excel でダウンロードし、次の授業の序盤で良いレポートを紹介したり、勘違いしているレポートの間違いを指摘したり、質問に答えたりすることで、講義内容の理解度を深めるとともに、教員と学生とのつながりを大切にしたい。

結果、うまくいったこと

期末レポートでは「本授業を後輩にお勧めすることを想定して、プレゼン資料を A4・2 枚でまとめる」という課題を書かせたところ、小レポートに対するフィードバックを丁寧にしたことへの評価が高かった。例えば、名前付きで「良いレポート」を紹介した点が学生のやる気を引き出したようだ（「悪いレポート」はもちろん匿名紹介）。また、パワーポイントの枚数や1枚あたりの文字数を減らすなど、情報量を減らしつつ、しっかり講義原稿を準備して漏れのないように解説した。その際、できるだけ「抽象的概念に対するわかりやすい具体例」をたくさん盛り込むことが理解を助けたようで、評価が良かった（例：授業での学びを日常生活にどう活かすかなど）。そのためのネタ集めに注力した。さらにアイスブレイキングとして、簡単な頭の体操クイズをしたのも、授業への参加意欲を引き出したようだ（ちなみにネタ元は通勤で聴いていたエフエム福岡「MORNING JAM」のクイズ）。

結果、うまくいかなかったこと

序盤の小レポートのフィードバックが長いという学生がいた（良かったという学生の方が多いので気にはしていない）。また、Teams 同時接続なのでどうしても授業中に落ちる学生が若干名いたが、チャットでフォローを丁寧にした。また、自宅が無理なら図書館を使うなどのアドバイスをした。Teams の顔の表示についても OFF することを OK にした。Team と Forms の仕組みを理解するのに時間がかかった学生も少数いたため、課題の提出がスムーズにいかないケースもみられた。

コロナ禍を経験したからこそ、授業改善の学び

フィードバックの重要性。立教大学の中原淳先生も「フィードバックに甘口も辛口もない。相手の成長を信じて、自分に見えている“あるがまま”をそのままかえすだけ」と指摘していますが、フィードバックは、学生の授業への理解を促進し、不安を払しょくし、学生と教員との距離を縮めてくれます。学生自身が他の活動でも同級生や後輩にいいフィードバックができるようにするためには、教員自身がいいフィードバックをしなくて行けないと思います。（講義によっては、課題を提出してもどう評価されているのかわからないといった不満もゼミ生たちから聞いていたので、そのことも踏まえ、この部分は意識的に取り組んでみたが、それが功を奏したようだ）

コロナ禍で得た学びを、授業改善にどう活かすか？

Sli.do 以外に、使えそうなツールを見出して活用したい。オンラインで外部講師をつないだ授業も力を入れた。また、引き続き小レポートへのフィードバックは丁寧に行いつつ、事前課題の導入を試みる。具体的には、実践レポート(授業で学んだことを実践してみて、その経験に対する振り返りのレポートを書いてもらう)、事前学習動画レポート(講義内容に関連する動画を予習として事前に視聴してもらい、その内容に対する感想を書いてもらう)、事前リサーチレポート(次の授業に関わるニュース記事を事前に調べ、知見をまとめる)等を課し、授業の序盤にそのレポートの内容(抜粋)を共有したうえで授業を開始するなど、工夫したい。

(文責: 見館好隆)



7. 廣渡 栄寿（基盤教育センター）

「アカデミック・スキルズⅠ」

配当年次：1年次（第一学期・全学必修）、受講者数：約45名×5～7コマ

授業内容

本授業の目的は、大学生活に必要な「考える力」の基礎となるスキルを身に付けること。第2回～第6回は情報教育、具体的には大学での学びや生

活に必要な知識や情報リテラシーの獲得(Moodle、Word、Excel、Eメール、情報セキュリティなど)を行い、第7回以降は様々なテーマを題材に個人ワークやグループワークを駆使したアクティブ・ラーニング形式の授業となる。例：身近な問題を取り上げ、それを分類し、議論するなど。

2020年度	オンライン(オンデマンド) ※7コマ担当
2021年度	教室(対面式) ※一部オンデマンド ※5コマ担当
2022年度(予定)	教室(対面式)

コロナ禍に際し、特に工夫したこと

オンラインによって脆弱になる、学生とのコミュニケーションを積極的に行った。具体的には学生の理解度を把握するための「質問の出やすい工夫」。例えば、毎回必ず「相談したいことがあったらいつでもメールください」と話しかけ、優しく話しかけやすい雰囲気づくりを行った。また動画を2部構成にして、第1部を前回授業の振り返り(学生からの質問を反映)、第2部を本編に分けて、授業の理解度を高める工夫をした。同時にメールでの問い合わせも大募集した。結果、例年に比べ莫大なメールが届き、返信を全員に行うことでさらに学生と教員との距離を縮めることに注力した。その他、Moodleのフィードバック機能でも質問等を受け付け、授業動画やメール等で回答を行った。

結果、うまくいったこと

前述した通り、メールやMoodleのフィードバック機能での問い合わせが増えたことで、学生と教員との交流はうまくいった。また、例年、課題を提示しリアルで行っていたグループワークについて、オンラインだとTeamsのブレイクアウトルーム機能を使ってもメンテナンスが十分にできず、逆にグループワークが嫌いになってしまう懸念があったため、個人ワークとなった結果、逆にコミュニケーション能力に自信がない学生が授業に出なくなることがほぼなくなった。もちろん、リアルに戻ればこの問題は再浮上するため、グループワークを実施する前の告知の徹底(いきなりあると嫌がる学生がいるため)や、グループワークの回数や時間を減らす、課題を取り組みやすいものにするなど、成功体験を積ませるようにしている。例：なぜグループワークが苦手な人があるのかについて、話し合うなど。

結果、うまくいかなかったこと

オンデマンド型のためどうしてもタイムラグが発生し、例年、毎回授業の序盤に行っていた学生からの質問をすべて反映することができなかった(その分、メールで個別にフォローアップした)。また、小レポートにおける「学んだこと」と「感想」の境界が曖昧で、良いレポートと悪いレポートが二極化してしまった。リアルの授業であれば、授業の序盤に学生からの質問や小レポートについて触れつつ、その都度学生の表情を見ることで学生の理解度の進捗を確かめながら授業を進めることができたが、オンデマンドではそれが難しいことを痛感した。なお、アカデミック・スキルズⅠ以外の授業において、オンデマンド型の授業の際に授業時間を活用して「生で」質問する時間を設けたがほとんど学生が来なかった。

コロナ禍を経験したからこそ、授業改善の学び

教室でリアルに行うことの「ライブ感」の重要性を再確認できた。学生の学習意欲を肌で感じ、教室で授業ができることを感謝しながら、発話の強弱も意識して、授業を行う決意を深めることができた。例えば、学生が教室に来たことのメリット(楽しさ)を感じられる工夫(問いかけること、挙手を促し意見を褒めることなど)をもっとしようと考えた。また、配布資料をMoodleに上げず、ノートテイキングを徹底的に促すなど。さらに授業での学びを動画で短くまとめて学びが深められなかった学生が視聴できるようにするなど、オンデマンドで培った動画作成のノウハウは、リアルになっても活用可能と考える。

コロナ禍で得た学びを、授業改善にどう活かすか？

オンデマンドの動画や Moodle での課題提示をもっと工夫することによって、徐々に反転授業を導入し、教室でリアルに行うことの「ライブ感」をさらに強めていきたい。具体的には、授業中にもっと「生で」質問が出るように、課題を事前に出し、学生に質問を考えさせるブレインライティングの時間を取る、課外における活動課題を課して、授業の序盤にその成果をグループで発表させるなど、本授業の目標である「情報技術を活用して、自分の考えを表現することができる」「正解のない課題の解決に向けて、諦めることなく考え抜くことができる」経験を、授業内で実感できるように追求したい。

(文責: 見館好隆)



第 5 章

FD 委員会について

(1) 活動概要

今年度、FD 委員会に設けられた 3 つのワーキング・グループ（以下、WG）の活動は以下の通りである。

研修 WG では、本学におけるアクティブ・ラーニングの推進、事前事後学習の確保、教育アセスメントの実施を主な目的に掲げて、全学研修を 5 件実施した。①「春季新任教員 FD 研修」（対象：新任教員、4/8 開催）、②「夏季新任教員 FD 研修」（対象：新任教員、9/17 開催）、③第 1 回全学 FD 研修「アフターコロナを見据えた反転授業方式のアクティブ・ラーニング」（対象：全教員、8/19 開催）、④第 2 回全学 FD 研修「アクティブ・ラーニング型授業における学生の学習を促す評価」（対象：学部学科代表、11/25 開催）の計 4 件の研修の企画・実施を行った。また、⑤「『データで見る』コロナ禍における本学学生の学修時間、学修相談、学生支援～2020 年度学修行動調査結果より～」（教育改革推進室教学 IR 推進部門主催、対象：全教員、3/30 開催）を実施した。これらの研修の報告は以下のページに示す「研修報告」を参照されたい。

FD 活動広報 WG では、コロナ禍で得た学びをリアルに融合させた授業事例を集めた特集ページを作ることを目指した。具体的には、2020 年度のオンラインを経て、アフターコロナだからこそ 2021 年度の第一学期にリアルで実践した、もしくは 2021 年度第二学期に実践中の授業の工夫について、インタビューを行った。対象者は、北方キャンパス 5 学部・学群各 1 名、基盤教育センター 1 名、そしてひびきのキャンパス 1 名の合計 7 名教員とし、学内をできる限り網羅した。結果、オンラインで得た ICT ツールの活用および、教室だからできる学習環境の実現、特に教員と学生、学生同士の交流を軸としたアクティブ・ラーニングの重要性を再確認できた。

授業評価 WG では、両キャンパスでのアンケート実施運営が円滑にできることを目指した活動を行った。その成果としては、教育の質保証の検証ができるようにアンケート項目の修正をしたこと、両キャンパスでのアンケート項目に英語を併記したこと、などが挙げられる。また、授業担当者以外へのアンケート結果公開の目途が立ったこともあり、近年の課題であったアンケート結果を組織的な授業改善に活かす道筋を見出すことができた。

また、各部局単位で、それぞれ独自の方法によって授業のピアレビューが行われ、学期ごとに FD 委員会に報告書が提出された。

(2) 活動一覧

<FD 委員会>

日程	回	内容
5 月 12 日 (Web 会議)	第 1 回	【議題】 1. 委員構成について 2. 2021 年度 春季新任教員研修実施報告 3. 2021 年度 FD 研修の実施について 【報告】 1. 2021 年度 FD 活動の推進予算配当結果について 【その他】 1. 2021 年度 FD 委員会開催予定
6 月 16 日 (Web 会議)	第 2 回	【議題】 1. 各 WG の進捗状況について 【その他】 1. 1 学期ピアレビュー実施報告の作成について 2. FD 図書購入希望について
10 月 20 日 (Web 会議)	第 3 回	【研修参加報告】 1. 「SPOD フォーラム 2021」(8/25～27) 参加報告について 【議題】 1. 2022 年度 FD 活動の推進予算について 2. 各 WG の進捗状況について 3. 第 2 回 全学 FD 研修実施について 【報告】 1. 1 学期ピアレビュー実施報告 2. 2021 年度 夏季新任教員 FD 研修実施報告 【その他】 1. 第 1 回全学 FD 研修の出席状況について 2. 図書購入希望について
12 月 1 日 (Web 会議)	第 4 回	【議題】 1. 2 学期 授業評価アンケートについて 【その他】 1. 2 学期ピアレビュー実施報告書の提出について 2. 年間ピアレビュー報告書の提出について 3. 2021 年度 FD 活動報告書の提出について 4. 2022 年度 FD 活動計画書の提出について 5. 2022 年度 FD 研修希望調査票の提出について 6. 文部科学省：産学連携教育イノベーター育成コンソーシアム 大学等における教育 FD 動画コンテンツの利用について
2 月 9 日 (Web 会議)	第 5 回	【議題】 1. 各 WG の進捗状況について 【その他】 1. 2 学期ピアレビュー実施報告書の提出について 2. 年間ピアレビュー報告書の提出について 3. 2021 年度 FD 活動報告書の提出について 4. 2022 年度 FD 活動計画書の提出について 5. 2022 年度 FD 研修希望調査票の提出について

3 月 16 日 (Web 会議)	第 6 回	【議題】 1. 各 WG の活動状況について 2. 2022 年度春季新教員研修について 3. 2021 年度 FD 活動報告について 4. 2022 年度 FD 活動計画について 【報告】 1. 2 学期ピアレビュー実施報告 2. 2022 年度 FD アドバイザーについて 【その他】 1. 第 3 回 FD 研修について（必修研修） 2. 文部科学省： 産学連携教育イノベーター育成コンソーシアム 大学等における教育 FD 動画コンテンツの利用について
----------------------	-------	---

＜研修・講演会等＞

日程	項目	講師等
4 月 1 日 4 月 8 日	春季新任教員 FD 研修 (制度研修、FD 研修)	中井 俊樹 (FD アドバイザー)
8 月 19 日	第 1 回 FD 研修（必修研修） 「アフターコロナを見据えた反転授業 方式のアクティブ・ラーニング」	中井 俊樹 (FD アドバイザー)
9 月 17 日	夏季新任教員 FD 研修	中井 俊樹 (FD アドバイザー)
11 月 25 日	第 2 回 FD 研修（代表者） 「アクティブ・ラーニング型授業に おける学生の学習を促す評価」	11 ページ参照
3 月 30 日	第 3 回 FD 研修（必修研修） 「データで見る」コロナ禍における 本学学生の学修時間、学修相談、学生支援 ～2020 年度学修行動調査結果より～	13 ページ参照

(3) 委員構成

2021年度のFD委員会は委員長1名、副委員長1名、委員16名、アドバイザー1名で構成される。

役割	氏名	所属	職名
委員長	柳井 雅人	経済学部経済学科	教授
副委員長	後藤 宇生	経済学部経済学科	教授
委員	齊藤 園子	外国語学部英米学科	准教授
委員	胡 玉華	外国語学部中国学科	教授
委員	李 東俊	外国語学部国際関係学科	准教授
委員	畔津 憲司	経済学部経済学科	准教授
委員	市原 勇一	経済学部経営情報学科	准教授
委員	梶原 将志	文学部比較文化学科・社会システム研究科	准教授
委員	山下 智也	文学部人間関係学科	准教授
委員	岡本 舞子	法学部法律学科	講師
委員	齋藤 友美子	法学部法律学科	講師
委員	見舘 好隆	地域戦略研究所（地域創生学群）	教授
委員	山崎 進	国際環境工学部情報システム工学科	准教授
委員	柳川 勝紀	国際環境工学部環境生命工学科	准教授
委員	高木 駿	基盤教育センター	准教授
委員	永末 康介	基盤教育センター	准教授
委員	村江 史年	基盤教育センター（ひびきの分室）	准教授
委員	高橋 秀直	マネジメント研究科	准教授
アドバイザー	中井 俊樹	FDアドバイザー	教授

第6章

おわりに

おわりに（中井俊樹 FD アドバイザー）

本年度、北九州市立大学のFDアドバイザーを担当させていただくことになりました。春季新任教員研修、夏季新任教員研修、2度の全学FD研修で講師を担当させていただきました。残念ながら、北九州市立大学に訪問することはできませんでしたが、FD委員会や関係者のご協力により、遠隔で4回の研修を無事終了することができました。また、多くの教職員にも参加いただき、どうもありがとうございました。

さて、今年度も新型コロナウイルスの影響で多くの授業が遠隔で実施されました。ただ、昨年度の経験を踏まえて、これまでの対面授業では考えられなかったさまざまな工夫を取り入れた実践が多く展開されたといえるでしょう。研修の中でもさまざまな工夫が共有されました。

コロナ禍の大学は特殊な状況ではあり、何が実施可能で何が実施可能でないのかに注目がいくのは当然でしょう。そもそも対面での教育ができるのかどうか、対面での教育ができるとしたら満たすべき条件はどのようなものかなどを、大学は明確にして構成員に伝える必要があります。しかし、教員としては実施可能性だけを検討すればよいというわけありません。むしろ、教員として何が重要で何が重要でないのかを見極めることこそが求められていると言えるでしょう。

教員として重要なことは、まずは学生の学習を止めないことです。そして、学生の学習の中で大切にしたいのが学習目標です。授業には学生や参加者が到達する学習目標があります。学習目標はどのような状況にあっても大切にすることを改めて確認する必要があるでしょう。裏を返せば、学習目標を達成するためにできることを考え、実行することが大原則となると言えます。したがって、対面での授業と同じやり方を新たな状況でも無理をして実現しようとしないようにしましょう。たとえば、教員が口頭で説明していたものは、学生や参加者に教科書や教材を読ませたり、関連する動画を紹介したりするなど無理のない手段を選びましょう。学生や参加者に議論させていた場合でも、ワークシートに書かせたり、オンライン上のチャットを活用したりできるでしょう。また、同じ時間に全員が同時に学習するという形式にもこだわる必要もないでしょう。もちろん、規則は守ったうえで、学生や参加者が学習目標に到達するためにどのような方法があるのかを柔軟に考える姿勢が重要でしょう。

手段よりも目標が大切というのは、より大きな視点でもあてはまります。大学には卒業時に身につけておくべき能力がディプロマ・ポリシーに定められています。個々の授業は長期的な目標に向けた手段としても位置づきます。つまり、たとえ一部の授業において学習目標が達成できなくても、別の授業や研修で挽回することができると柔軟に考えるとよいでしょう。

コロナ禍における実践を通して、遠隔授業ならではの強みも明らかになってきたと言えます。第一に、学生全員の意見を瞬時に収集し共有することができる点は大きな強みです。たとえば、学生が Zoom 上にいれば、チャット等を通して意見がすぐにわかります。クイズ形式の発問をするのも一つの方法です。Zoom の投票やチャットなども使うことができます。チャットでは発言が流れてしまうのであれば、Zoom のホワイトボード機能を使うこともできます。ホワイトボードを使うと、メリットとデメリットを分けるようにするなど、空間を使って意見を整理することもできます。また、学生の環境を確認した上で、Jamboard などの他のアプリを併用することもできるでしょう。

第二に、オンライン上でのグループワークの機能も多くの教員は予想以上に授業に使えると感じたのではないのでしょうか。ただ、学生がそれぞれのグループに入ってしまうと、今まで画面共有していたものが見えなくなるため、指示を忘れてしまう学生が出てくることがあります。発問の内容、役割分担、時間配分、終了後の共有の方法等に関する指示を明確に与えておくことが重要です。また、議論の方法のグランドルールを設定し共有しておくとい良いでしょう。

第三に、動画教材の活用も潜在的な可能性をもっています。講義部分は動画にし、演習の時間を確保する方向に進むと考えられます。私も担当授業がオンデマンド型のものが多く、YouTube に自分の授業をアップしています。特によかったと思うのは字幕が入ることです。自動生成の字幕には修正も必要ですが、合理的配慮が必要な学生が受講者にいて、字幕を付けなければならなかったのが助かりました。単に聴覚障害のある学生にとって役立つだけでなく、一般の学生の通学中の視聴にもつながったようです。ついていけない学生は繰り返し見ることができ、ある程度知っている学生は早送りにして進めることもできます。

今後は、これまでの経験を踏まえて、単なる代替的な手段としてではなく教育の高度化に向けたデジタル活用が期待されるでしょう。デジタル活用は手段に過ぎません。目標のひとつとなりそうなのが、個別最適化された学習を実現することです。希望する時間と場所での学習、ニーズや習熟度に合った学習、多様な学生に適した学習などが提供されることが期待されるでしょう。

多くの人は個別最適化された学習は高度なシステムがなければ実現できないと言うかもしれませんが、個々の教員でも一定程度は可能です。また、個々の教員が準備を行っていかなければ、システムが用意されたとしても間に合いません。授業動画をウェブサイトなどで公開するだけで、学生が希望する時間と場所での学習につながります。また、補習教材や発展教材を作ることで、習熟度に合った学習につながります。動画に字幕を入れれば、多様な学生に適した学習にもつながります。

個々の教員の工夫が新しい教育の形をつくっていくのではないのでしょうか。今後も個々の教員がもつ授業の工夫を共有し、北九州市立大学の教育の新しい形をつくりあげていくことを期待しています。

2021 年度 北九州市立大学 FD 活動報告書
2022 年 3 月発行

編集・発行 北九州市立大学 FD 委員会
〒802-8577

福岡県北九州市小倉南区北方四丁目 2 番 1 号